
月夜の日の出来事

璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の日の出来事

【Nコード】

N4587C

【作者名】

璃

【あらすじ】

迷宮の十字路より新一と蘭が待ち合わせした月が出た日の出来事。その事についてです。新蘭です。でも新一もコナンも出て来ない話です。

月が出没する夜。いつも脳裏に鮮明に浮かぶ。

ある時に幼なじみと約束した事を。そして約束の待ち合わせ場所に二時間も遅れた事を。

此処は、米花町五丁目の毛利探偵事務所。事件の捜査やらで東京に留まっていた平次と付き添いの和葉も探偵事務所に泊めて貰える事になった。

平次はコナンと小五郎の部屋に和葉は蘭の部屋にそれぞれ別室に泊まった。平次やコナンの居る男性陣の部屋は早速小五郎が眠りに入った為その躰がやけに五月蠅くて悪戦苦闘している。

蘭や和葉は寝る前にと髪を整える等をする。

「見て！ 蘭ちゃん月や！！今日は月が出とるで。残念な事に雲のせいで半分隠れて満月やないけど、綺麗やで」

和葉が大声を張り上げて外に視線を泳がす。透き通った薄暗い窓から玲瓏と輝く月が映る。

気分上昇な和葉が蘭に向かって視線を送る。和葉の双眸は皓々と照らす月を見詰める。

「うん、月ね……懐かしいわね。確かあの時も今日みたい月が雲によって隠れていたわね」

和葉の呟いた言葉にたいして陰鬱な表情へと変える。心情吐露を剥き出しのような語調で溢す。
遣りきれない心情が思わず露になって表れる。

（蘭ちゃん……）

彩りのある蒼い双眸が不意に潤む。涙腺が緩んだわけでは無いが表情が鬱になっていく。

潤んだ双眸に映る視界は遮られる。

「あつ、もう十二時やないの!!」

「うん。たしかに事件とかでかなり遅くなってしまったわね。そういえば事件の時って十時から十二時ぐらいまで掛かるよね」

艶麗で蒼い双眸は不意に和葉の方向へと視線を移す。

いつものように相好を崩し口許を緩ませる。

相変わらずの清純な蘭らしい仕草をする。

「でも、何で平次はそんなに事件ばかり追い求めるんやろ？ いや事件で忙しいのは分かるけど……でもな実は平次危険な事に巻き込まれていないかて心配なんや」

不可解に思い蘭にたいして訊ねるように溢す。顎に手を添えて不

意に眉をしかめる。

「そっか。やっぱり服部君も新一と一緒にだね。似ているね。あの二人」

その麗しい表情は相変わらず綻びる。相好を崩した素の表情を示唆する。

「えっ？ 工藤君も？確かに工藤君も平次に似た要素はあるけど。平次みたいに時間とかにルーズって事ないやろ？前に梅田のビッグマンで待たされたっていう事もあるしな。しかも、四時間やで！四時間！！」

事を流暢に語る和葉の表情が段々と尖っていく。『四時間』と云う語句をやたらと強調させて柳眉を逆立てる。

「でも新一だって同じよ。だっていつもいつも時間には遅れるし、二時間も待っていた事もあるよ」

切々と陳述する蘭の表情は憂色を浮かべる。私情を吐露しないように心掛けている蘭は空笑いを含める。無性に哀しく感じた事を覆い被せるように薄笑いを浮かべる。

「二時間も？平次の二分の一の時間で収まっているけど、工藤君もわりと約束の時間に遅れるの？」

「うん。そうね。だってしょうがないよ。アイツ推理バカだもん。でもそんなアイツの事を心から心配しているっていうのは確かなのだから今現在だって待っているの……。幼い事から新一の性格を知っているから今更ね、考えても仕方ないしね」

堪えきれない私情が露にして表れる。

愁色な表情を浮かべる。

可憐な蘭の表情が憂いを含み崩れていく。

（蘭ちゃん……）

同情にして哀れんだように変える。和葉の臉が細められる。

「蘭ちゃんって工藤君と待ち合わせしたりしたの？　ちょっと気になったから訊いたんや」

「うん…とある月の日からね新一と約束したの…その時間に近くのホテルに来てってね」

「とある日って……」

「実は私の誕生日だったの…その日に新一事件の調査に行っていたの。それで事件解決に忙しくて忘れていたの。その事は新一本人が言ってたわ」

過去を振り返る蘭は憂いを含んで淡々と述べる。　声の通りが段々と掠れていく。

「あの時は本当に心配したわ。事件に遭って新一の身に何か起きたんじゃないかって…月を見る度に思い出すのよ。過去の大切な思い出をね。そして何時か逢えると信じているの…逢える時があるって…だから今も待っているんだ！　逢った時の嬉しいがある事をだけを信じてね」

蘭はその艶麗な表情を紅潮させて莞爾と笑う。
それが彼女・蘭がよく見せる空笑いだと悟られないような演技をして。

「じゃあ、和葉ちゃん寝よう！」

蘭の口許が不意に綻びる。嬌然な笑みを浮かべて部屋の灯りを消す。

その麗しい双眸を和葉の視界内に留まるように向ける。

「うん」

（蘭ちゃんは強いな……あたしは）

自分より置かれた状況が辛い蘭にたいして思わず愚痴ってしまった事にたいして情けなく思い、自嘲気味になる。

思い詰まった心情を解消しようとしつつベッドにへと仰臥する。

雲に覆われた月が映った日。それは蘭の誕生日でもあり、蘭と新一が待ち合わせをした日。

蘭は本当に満足では無い。しかし、彼女は強かった。

如何なる時も決して新一が帰って来ないと云う事を否定しなかった。

強く信じていた。いつか逢えなかった分の嬉しいを得られると。

それは新一と逢えてからの事だけど。

またあのトロピカルランドで遊んだ時のような幸せな日々が来ると信じて……。

蘭はまた明日をむかえようと誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587c/>

月夜の日の出来事

2010年10月28日07時15分発行